国　語

以下で引用している問題は、すべて2025年度前期入試の問題です。

例年の入試説明会で、国語科からお話しているのは以下のことです。

- 読解と表現との二本柱を立て、長文をじっくり読み通すこと、自らの考えを記述して答えることを重視しています。
- 小説の主人公の人物像や行動を読み取ることは、読者である私たちの生き方や経験にかかわっています。日頃から小説など数多くの文章を読む中で、人の心の動きや考え方について学ぶようにしてください。
- 漢字の書き取り問題：　残念ながら、字体が乱れ、読めない漢字を書く人がいます。とめ・はね・はらい・文字の形をきちんと意識して、ていねいに書く練習を怠(おこた)らないでください。いいかげんな文字には点数を与えません。
- 選択肢問題：　内容読解の問題では、傍線部(ぼうせんぶ)周辺の数行程度しか見ないで答えている人が多いようです。全文をしっかり読み通すことが、どの問題を解く上でも基本になります。
- 記述問題：　読むことに十分な時間をかけて、ていねいに考えて書いてください。とくに解答欄(かいとうらん)が大きい問題は、読み取って考えたことを、自分の言葉で存分に書いてほしいと思います。傍線部の前後の引用だけですませたり、自分勝手な思い込みでストーリーを作ったりしてはいけません。記述問題の配点は、全体の半分を超えることもあります。自分の言葉で書いて表すことをよく練習してください。それには、文章を自分の頭と心でしっかり読み通すことが絶対必要なのです。

では具体的に、2025度の前期入試問題で上記の注意点を説明したいと思います。

2025年度の前期入試では、吉野源三郎（よしの　げんざぶろう）の『君たちはどう生きるか』という小説から出題しました。1937年（昭和12年）に発表された古い作品ですが、今なお読み継がれている児童文学の名作の１つと言えるでしょう。現在活躍(かつやく)する作家の作品だけではなく、文学史に残る作家の作品もぜひ読んでもらいたいと考えています。古今を問わない幅(はば)広い読書経験を積むことで、優れた文章に多く触れ、豊かな感性をはぐくんでもらいたいという本校の国語科からのメッセージです。また、古い文章の文体にも、ある程度は慣(な)れておいてほしいと思います。

設問については、本文の内容を正しく読み取る力を問うものだけではなく、問十二のように、本文を正しく理解した上で、傍線部で示された部分の表現の意味を考えて、さらにその内容や根拠を自分の言葉で説明するという問題もありました。正解を求めるという姿勢はもちろん大切ですが、根拠を示しながら自分の考えを説明するという姿勢も本校では重視しています。日頃の読書など文章を読むときには、内容や表現について「どういうことなんだろう」「なぜなん

だろう」という疑問を持ちながら、それを自分の言葉で説明するという練習もしてほしいと思います。
　ここでは、問十二を例に挙げて、説明したいと思います。

　まず設問を確認しましょう。本文160行目の傍線部⑫「『それでよし。それでよし。』どこからともなく、そんな声が微かに聞えて来るような気がします」とあります。この部分には、「コペル君」のどのような気持ちが表れていますか、と問うています。また、答える際には、「それでよし、それでよし」という声がどのようなものかをふまえることを求めています。
　このように、難しい問題であっても、問題文の中に解答をどのように作ればよいかについて、考える方向性を示していることが多くあります。受験生の皆さんへの、問題を作っている私たちからのメッセージでもあり、問題を解くときのヒントでもありますから、十分注意して問題文を読むようにしてください。そして、いったいどのような答えがよいのかを考えてみてください。機械的に即答できる問題を解くことだけでは、あるいは、自分で考えることを深めないで本文の言葉を適当に結び付けて答えらしいものを作るだけでは、国語の力は伸びていきません。繰り返しになりますが、本文の言葉を適当に抜き出すのではなく、自分の言葉で、自分の考えを相手に正しく伝えられるよう、心掛けましょう。
　さて、解答する際には、以下の２点に気を付けて下さい。
（１）「それでよし、それでよし」という微かな声がいったいどのようなものなのか、考えてみましょう。
（２）この傍線部から読み取れる「コペル君」の気持ちはどのようなものなのかを、考えてみましょう。

　ははじめに、（１）の「それでよし、それでよし」という声について考えてみます。まず「それでよし」の「それ」は、何を指し示していますか。ここでは、「コペル君」が北見君たちに対して手紙を書いたことを指しています。
　手紙の内容は、以下の通りです。

・自分に勇気がないばかりに友達との約束を破ってしまい、心から悪かったと反省しているということ
・友達のことを大切に思っているということ
・これからは二度と同じ間違いは繰り返さないと決意しているということ

　次に、このような手紙を書くことは「よいこと」だという、前向きで肯定的な言葉が、「それでよし、それでよし」だと分かります。では一体誰の言葉なのでしょうか。
　これまでの話の流れを思い返してみましょう。「コペル君」は、叔父さんとのやり取りの中で、自分の弱い部分、自分の甘えた部分に気付き、最後は素直に謝るために手紙を書くことを

決めました。ここから、この声は、もし目の前に叔父さんがいたならば、「それでよし」と言ってくれたのではないかという、「コペル君」の想像した叔父さんの声、という解釈ができるでしょう。

あるいは、自分の弱さや甘えと向き合い手紙を書けたことへの、自分自身の声、つまり、自分の中の良心、正しく生きようとする思いが、まるで「声」となって聞こえたのだと考えることもできるでしょう。

いずれにせよ、ここでは、「それでよし、それでよし」という言葉が、「コペル君」にとって前向きなものになっているという理解が必要です。

続いて、（２）の「コペル君」の気持ちについて考えてみましょう。

「コペル君」は、自分の弱さや甘えと向き合い、友達にたとえ嫌われたとしても、自分が素直に謝るべきだと思い直し、謝罪の手紙を書くことができました。このように、叔父さんや自分の良心に恥じない、さらには、人間として正しい行動が取れたという、晴れ晴れした思いがあることがわかります。このように、晴れ晴れした気持ち、や、自分の行動を自分で認める前向きな気持ち、といったことが理解できると思います。

以上を踏まえて、解答を書いてみましょう。

ここで、答案を書く上での注意をあげておきます。

いきなり気持ちを説明するのではなく、まず傍線部がどういうことを言っているのかを考えましょう。たとえば「それでよし」という言葉。それを説明するだけでも他の答案と差が出ました。あわてず、傍線部が何を言っているのかを考えることが大切です。次に、本文に沿って説明したいのは分かるのですが、そのことが何を言っているのか、自分の言葉でおぎないながら説明する必要があります。本文を写しながら具体的に書けていても、それが指している内容が示されていなければ、説明したことにはなりません。

その他にも、指示語の指示内容を説明したり、たとえた表現をわかりやすく言い直したりという工夫も必要です。相手にきちんと正しく伝えたいという思いを持ちながら解答して欲しいと思います。

今回の入試では、国語の答案全体で、何も答えが書かれていない答案というのはほとんどありませんでした。それほど受験生は真剣にこの問題に取り組んでくれていたと思います。むしろ時間が余ったという受験生も少なからずいたのではないでしょうか。そういうときは自分の作った記述問題の答案がきちんと伝わる文章になっているか見直すことが大切です。見直していれば、先に述べたような説明不足や文章のおかしさにも気づくと思います。あまった時間の使い方も大切です。

その他、解答の形式に注意できていない答案も見られました。

例えば、気持ちを問う設問であるにもかかわらず、「〇〇という気持ち。」と答えられていな

い答案が一定数見られました。実際に問題を解く練習をするときには、「何が問われ」「どのように答えなければならないか」を常に意識しながら取り組むようにしてください。

また、漢字の書き取りについても注意が必要です。一画ずつ丁寧に書くようにしてください。漢字は語い力です。一つひとつの漢字は知っていても、それらを組み合わせた熟語になると分からないということはないでしょうか。様々なジャンルの文章を読んで、たくさんの語いに触れて下さい。

最後に。

今の自分にはない考え方や価値観、文体に出会えるのが、小説を読む醍醐味（だいごみ）です。そうした「読書経験の差」は、試験の場で目にする作品に対応する力として現れてきます。ぜひ多くの作品に触れて下さい。